

無著禪師の思想

南 川 宗 謙

緒 言

無著禪師の思想及其禪的思想を窺つて見たいと思ふ。言ふまでもなく禪とは不立文字教外別傳の意であるから其思想を論理的に體系付けることは容易でない。此事は古來の祖師先徳の語録に現れてゐるやうに經錄一般は論理的歸結の表現でなく宗教的體驗内容の記述であるからである。然も初祖達磨より五祖弘忍までは教禪混合であつたが六祖惠能が碓房より出でし佛祖命脈を繼いでより以後は惟論見性不論禪定解脫（六祖壇經八丁左）と云へる如く、頓悟的見性成佛の思想が源流となり唐五代になつて五家七宗の分派を見るに至つたが之等も祖師の根本的思想の相異でなく人格的體驗の相異である。換言せば見性成佛せしむる指導型の相異であつて例へば臨濟の四量見、洞山の五位、汾陽の十八門、僞仰九十六ヶの圖相、法眼の四量見の如くである。従つて道忠禪師の思想も見性成佛であるが其指導型に於いては自ら區別があつて見性成佛を強張すると共に宗義闡明をもつて時弊の救済に努力されたのである。

一 無著禪師前後に於ける思想界概観

無著禪師の思想を窺ふに當つて先づ始めに當時の思想界を概観して見やう。禪師の出生は承應二年西紀一六五三徳川四代將軍家綱の時代であつて示寂は延享元年紀一七四四八代將軍吉宗の時であるから恰も禪宗史上黄金時代を現出した夢窓疎石が佛光祖元の潑刺な禪風を擧揚してより三百餘の歲月を經、東山時代の餘弊を受けて五山の僧徒は平和に馴れて文學に耽り適々典録を講ずるも講學を事として宗旨の參翳を忘却してゐたのであつた。のみならず幕府の政策に左右せられて權勢に阿り政治に參與すると共に寺院法度を作らしめて之に反く者は嚴罰に處することゝした。これ一面には封録を與へて恩惠を施すと同時に他面法度を以つて自由を束縛したのである。爲めに諸宗は何れも新生面を開き得なかつたのである。乃ち大徳、妙心に於ても元和元年五ヶ條の法度を受け寛永六年家光は又之を改正して嚴重の度を加へるなど宗團の勢力を殺がが爲に壓迫干渉するに至つたのである。

此間濟門に在つて光を放つてゐたのは澤菴、大愚、愚堂、白隱、古月等である。澤菴宗彭(一七七一)は大徳派下の人であつて後水尾太上皇の歸依を受けて禁中に法を説き又將軍家光に崇拜せられて東都に東海寺を創建した又妙心派下に於ては大愚宗築(一五八四)出でて奇行を好み寛永三年妙心に出世するに及んで後水尾法皇は召して法を問はんとされたに拘らず遂に態せず。正保四年江戸に於いて

も家光が祖心尼を遣して延見を求めたが其夕遁れて又出でなかつた。更に愚堂東寔(一五八九
一六七二)は越州に於いて宗旗を翻し寛永五年勅を奉じてから後水尾法皇の歸依を得て屢々便殿に法を説き將軍の歸依も厚く諸方に遊歴して豊後伊勢美濃等に大寺を造營するなど道風一世に高く大圓寶鑑國師の謚號がある。之より稍後れて白隱慧鶴(一六二六
一七〇六)は自ら五百年間出の僧と稱し禪界に一大新生面を開き其道風は天下を震撼し上禁裡より下匹夫匹婦に至るまで化を蒙らない者はなかつた。今白隱と無著とは六十年間の同時在世であつて「一は近代禪門を改革したる偉人であり一は諄々として講經編纂に従事したのであるが不出世の偉材にして何れも宗門興隆に盡した點に於いては相等しいと云はねばならぬ。次に九州に在つて覇を唱へ一派の禪を唱へた古月禪材(一六六七
一七五二)は無著に後るゝこと十四年、示寂又七年の後であつて恰も寶四年無相大師三百五十年忌は正受考人六十七歳、無著五十七歳古月四十三歳、白隱は二十五歳であつて年齢には差こそあれ當代の四師は何れも名聲を博してゐた事は言ふまでもない遠忌後に於ける四師の在世年數は正受十三年、無著二十五年、古月四十三年、白隱は六十年間にして何れも八十以上の高齡を保ち宗門の傳道に貢獻した。即白隱は遠忌の年、遠州駿州より大阪に轉じて法幢を揚げ、無著は法山の壁書を統一し分類して妙心一派の法規を補足し法山をして宗門無雙の禪刹たるに恥ぢざる道場たらしめやうとした。願ふに往年宸翰中にある一流再興と妙心寺造營以下の勅文に依りて無著白隱を評せんか無著は妙心寺造營に力め、一流再興の傳法

に盡したのは白隱である〔妙心寺誌一九四頁參照〕と評してゐる如く兩師は共に空前絶後の傑僧といはねばならぬ。更に師蠻(一七二〇)は延寶傳燈錄四十卷並に本朝高僧傳を纂して一千六百六十二人の傳を作つて禪宗史上に異彩を放つた。

之より先明僧隱元隆琦(一六七五)は無著出生の翌承應三年我國に歸化して破菴派下の禪を擧揚したので教界に非常なる刺戟を與へ宇治に黃檗山を開くに至つて天下の豪傑は競ふて之に馳せ一見臨濟の門風も壓倒さるゝの感を呈するに至つた。これ當時我國文化の糧は明國を範とせし爲め隱元の純粹なる支那趣味と文藝とは一朝にして朝野人士の衆目を曳くに至り旭日昇天の勢をもつて崇敬の的となつたのである。就中鐵眼は行脚多年淨財を集めて明版一切經を刊行して學界を裨益した。又曹洞に於ても卍山(一六三五)ありて宗統復古を著して法統の亂脈を匡正するなど漸く禪門復興の曙光を見るに至つた。又他の教界を見るに華嚴の鳳潭(一七五八)は已見を以つて各宗を論評し著述を事とした爲め守株の僧は馭せんが爲めに書を著して抗爭し前古未曾有の活氣を呈したのである。

更に眼を轉じて當時の學界を一瞥するならば國學の復興に伴ふて廢佛論が唱へられるやうになつたのである。これ國學の理想は儒佛の影響を蒙らない神代の善風美俗にあるをもつて必然的に佛教を排しなければならぬ謬論を立てるに至つたのである。その始め北畠親房、山崎重加、荷田春鷹、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤等に依つて唱へられた復古神道であつて何れも古代を研究すると共

に書を著して佛教を排斥した。續いて徳川時代には林羅山(一五八四—一六五七)は宋儒の性理學を奉じ佛教を罵つて曰く「要之浮屠氏畢竟以山河大地爲假人倫、爲幻妄、遂絶滅義理、有罪於我道、故曰、事君必忠、事親必孝、彼去君臣棄父子以求道、故曰、吾道非彼所謂道」羅山文集五六と論じ又藤樹(一六〇八—一六八四)は翁問答を著して、「儒者悟道則其心愈細、禪家悟道則其心愈粗」と云ひ熊澤蕃山(一六九一—一七六九)は同じく宋儒の心即理説を主張して曰く、「佛子の學は死を懼るゝに依れり、故に云ひて止まず、禪では悟れりと云へども死を懼れるより悟りを求めるのである。聖學の徒は死生を晝夜とするが常なれば恐るゝ處なし故に死を厭はず云云」と云ひし如く何れも皮相の見を以つて佛教を難じ、又山崎闇齋(一六八三—一七六〇)は初め妙心寺大通院に出家したが後還俗して晩年垂加神道を唱へ日本精神を鼓吹し士風を改新して日本儒學を發展せしめた。その他武士道精神も鼓吹した山鹿素行(一六二一—一六八四)及び門弟三千と稱されし伊藤仁齋(一七〇五—一七六二)及び仁齋學を繼承して江戸に上り將軍綱吉の謠學に乗じて儒學主義を發展せしめた。物徂徠(一七三六—一七九〇)等何れも當代を風靡し、更に石田梅巖出で、心學一派を開くなど儒學史上に於いても多士濟々の時代であつた。

二 禪師の根本思想

是の如く當時は學界教界を通じて註疏考證の風行はれ公然書を著して佛教を論難し特に禪の如きは虛妄異端にして人心を惑はすものゝ如く傳へられたため諸般の識者も亦之に禍せられて顧るもの

なく佛祖不傳の潑刺たる禪風は僅に一箇兩箇に依つて其命脈を保つに過ぎなかつたのである。従つて教界の大勢は擧げて魔道に趣き俗儒に伍して講學を事とし空しく平安の夢を貪つて自家裡の寶玉を省る者少なく實に命危きこと懸絲の如き状態であつた。此時に生を享けられた無著禪師が宗門の復興、宗義の闡明に畢世の努力を惜しまれなかつたのも當然の理であると共に滔々たる時代の潮流に溺れず名利を捨て、粉骨細心、禪門典録の述作に精進された處に禪師の偉大なる面目を窺ふ事が出来る。今「答東壽首座」の文を見るに

近年儒者佛者承昇平之間暇、以述作簧鼓于朝野、不是苦海之波瀾則峨帽之鷓鼻也、希嫖娖者、遺有識之笑、望沾利者、還到惑世焉(照冰文集擇卷二)

と述べてゐる如く當時の禪僧が或者は沾利の爲に典録の講衍を事とし、且つその生命たる宗旨の本領を忘却し、或者は禪坐を事とすると雖も默盟に墮して魔道を出でざる如く悉く世の太平に馴れて安眠高臥するに非れば詩文を弄し疏述を事とせる時弊を看破し之を匡正せんとされたのである。又曰く

野衲往年奔走教肆有所粗剽聞矣、晚歲切知溥沱大師謂施設藥病、表顯名句、云云(虛凝集卷十 六巳丑之書)

と之れ禪師が幼より内外典籍に普く眼を洒し、而して後、行脚する事多年、窮め去り窮め來り遂に

三十五歳にして宗旨の蘊奥に徹し、此處に於いて釋尊四十九年横説縦説の大藏は只是れ施設藥病、表顯文句なりと悟得された體驗より先には文字言詮を破斥し後には更に向上の一路離言の宗ある事を示されたものである。更に江州龍潭寺法寶輪藏記を見るに

或人謂、龍潭禪刹、子亦宗離言、而其於教迹睭々、吾竊惑焉。予曰、王十朋曾以此、問雪堂。堂曰、經是佛語、以心爲宗、吾亦爲子、衍其說、夫調御尊地、如高廣臺榭也、上器不消一躍、能仁氏爲劣根之加額、而絕望、遵古聖嘉謨、架三道梯階、設門八萬四千、假名一句一身、不説而説、所謂頓漸半滿、開遮持犯、正邪立破、蒼之而鏤貝多、名爲藏教焉、自時厥後、聲詮之所及、得門而入、陵梯而躋、證悟佛地、縱臺榭之遊戯者、不啻百焉千焉、而過無央數焉。迨未代退方、葛狗證悟、擣擗名句文、於是乎藏教何必也、梯階變而森名相之荆棘、門戶鑿而擊見執之坎阱、行之者、滅趾陷軀、穿之者、勾衣傷膚、天下固然、莫知其復、大異乎能仁氏之撰也。(虛凝集卷十二 丁卯記上)

と記してゐる。之に依るも藏經は入路の門であり入道の梯階である。門を得て入り梯を陵ひて躋り佛地を證悟するの施設である。されど名相の荆棘を昌にし見執の坎阱を穿つ者は身を陥れ膚を傷ふと垂誠されてゐるのである。更に語を進めて曰く

吾達磨氏憫此遠來、痛楚除焉、力釘翻焉、乃徇日、教外別傳、不立文字、直指人心、見性成佛

蓋達磨氏所以翻除者唯爲棘阱之者、非於梯戶之者、何以知之、夫廓然無聖之接梁皇、不亦過梯乎。佛語心品之證正宗、不亦由戶乎、古云、誦味聖言、契合心地、不虛開卷、始會看經、苟假文字、如此、則達磨氏不必離焉。古之宗於離言者、曹溪假乎金剛、永嘉假乎維摩、是假而去者、藥山不停遮眼於涅槃、汾陽六閱全藏、是假而來者、假而來者、爲人、假而去者、爲己、如此數師、皆吾宗柱礎、而尙能假焉、今約住禪客、問微塵裡大經卷、是何等文字、則其地步、會一執掌座主之不若、却籛弄學得、高抽起尼師壇、逃於者箇離唇吻、不可言不可宣、而紛然不知愧、豈復達磨氏之離文字哉、是吾懷々乎彼、以故慙々乎此也。

(全書)

と初祖達磨大師が九年面壁不説の説を以つて化度されし所以を明かにし又曹溪、永嘉が文字を假つて道に入り、藥山、汾陽の文字に遮へられずして共に離言の宗を全ふされし所以を例證し且つ當時の禪僧が此無字教を會せずして徒に學解を弄し、又或者は離文字の句を擔ひ不可言、不可説に逃れて而も愧を知らざることの魔道なるを痛憤して問者に答へられたのである。而して最後に

若復喬迹於閑藏、射名聞恭敬、偷寮舍安佚、規施利飽煖、則於是乎、藏經何必也、就舊之梯階門戶處、支開火刀血之途矣、亦大異乎能冬之撰也、噫嘻可不懍乎哉、噫嘻可不警乎哉。(同上)

と結んで能冬なる士が清國渡來の正、續、又續、一切藏經玖千伍百陸拾伍卷を贖ふて龍潭禪寺に寄せ十方雲客の看閱に充てたる美事善根を賞讚し以つて己れの意の存する處を述べられたのである。之れ師が道業成就の後四十五歳より九十二歳の末後に至るまで逐年閱書記に記せる如く毎歳數百卷の書を讀破し如何に法務の多端なる日と雖も筆硯を弄して精勤を拔んでられし所以であつて照冰堂紀年錄四十六歳、十月の記に「寫開福寧禪師語錄都四十八張此元本不久留、十三日外十丈、十四日赴會評寫三紙十五日有客書、十二丈、夜十丈、十六日伴衆赴東福開山忌寫十丈十七日、十三丈、全部畢。」とあるを見れば師の努力の一斑を窺ふに足ると共に典錄に對する思想をも知る事が出来る。次に「與默首座」の書に曰く、

人之患、無過乎好爲人師矣、況時處皆於蒙末可也、何者、以道業未熟之軀而處于耆宿俊髦之際焉、唯足招易佛法、而罔長老之罪、無致射半箇而生片信之益、云云（照冰文集擇省卷三丙寅書）

と此書は師道業成就の前年の作なれども此處世觀は終世一貫の思想である。更に又曰く、

來教所論、唯知垂足豎指之爲道、不知門庭施設禪備衆格之說、誠如高議焉、所謂一味悟底乏方便也、由余觀之、祖道掃地、今時之所爲垂、恐非古之足、今時之所爲豎、恐非古之指、只是叢林傳習不據本源、苟不據本源則門庭施設亦帶墜于戲論之域矣、護法大士至於斯

可不嗚咽悲泣耶。(同上)

之れ師の道眼能く時弊を看破せられし處にして當時有力の禪知識に乏しく亂に傳習の法を賣るの非なる事を論じ、且つ苟も本源に據らずんば門庭の施設も亦戲論の域に帶墜すと述べられし處に師をして畢世の努力を傾注せしめたる宗義闡明への根本思想が開示されてゐる。又曰く、

有處布薩說戒、外相動男女、內心媒于覿利、有處鶻菴禪不管邪正向背、嘯聚愚瞽、敢令之道、我會裡佛經不許繙、祖錄不許攤、一向默坐、此爲辨道也。魯鈍懈怠大驢其說、盡放捨艱途、而犇就順水、疊脚於床上、檀共實腹、唱云、我見有緣師、始獲大安樂地焉、噫嘻松源祖師道、兄弟正路上行者有、只不能用黑豆法、臨濟之道、將泯絕、夫眞行正路上尙不足、隆臨濟之道、矧於箇鶻菴乎、抑黑豆法者、細大之法門也、苟施之於未悟則足以醞無明酒矣、然欲待爾之悟、而爲語之、汇乎不識期限、玄道或幾乎息矣、於是乎、不遑避拔舌犁耕之罪、簸颺鷓臯、忝辱宗風、彼此不得便宜、何裨益之有。(虛凝集十八卷庚戌書)

と記せる如く當時の禪徒が默照打坐を以つて辨道となし、空しく檀施を貪つた無爲徒食し、遇々布薩說戒の會を營むも世利を求むるに專にして大法を忘ずるの邪なることを指摘し更に松源祖師の語を曳いて臨濟の宗風の奈邊に在るかを明にしてゐる。之れ當時禪徒の垂誠なるのみならず現代禪徒に投げられた鍼言として味ふべきものである。是の如き昭々たる禪師の宗風は必ずしも當時の禪界を

風靡してゐたのであらう。元祿元年師三十六歳の時已に令名を天下に馳せてゐた事は次の文に依つて明である。「答澄水和尙書」に曰く

來諭云、駿州洞宗刹竿相望、列職分局、殆三百餘區、而如我法脈則不及其半、又無匡徒領衆者。乃激弟曰、其居衆流之源、而枯活在掌、若令新前堂、無大無小、還國一番建法幢則宗教可復矣。(照冰文集擇省卷二)

と是れ澄水和尙(靜岡寶壽寺交友之條參照)が遙に師の道風を慕ふの餘り、師をして駿州に法幢を掲げしめて洞派に對峙せしめんとされたのである。然るに師は之に應ぜずして曰く、

上略然扣夷齊之戸、求粟則不遇、答以待盡也、所謂居衆流之源者、如百工居京師、而不得盡爲皇帝、所謂枯活在掌者、外護王臣僧錄司之所爲、而非微軀之所能爲也、縱令微軀行王臣僧錄司之事、若不量才力、一齊令聚衆匡徒、則宗教之衰廢、甚カラシ於振稿。

と記せる如く當時有力の禪知識之しきに拘らず傳統的形式に捉はれたる形骸佛法によつては世を救ひ能はざるのみか却つて世を毒するものである。此時に際して吾れ獨り正道に立つて法旗を掲ぐるとも到底一指のよく大家を支へ與はざるが如く必ずや夷齊の轍を蹈むに過ぎないとの意を述べられたものであらう。換言せば宗門の興隆は有力の善識に俟たねばならぬ。縱令千萬人の多衆を領するとも一隻眼を具する底の者を得ざれば只是れ雜行に過ぎぬとの意であらう。又曰く、

今有「不假王臣僧錄司」、而思可得行者、其事甚易而忠猶未會能之、可得行者何、但是忠自家裡之恢復也、夫自家裡之恢復、則人孰得拒之、忠苟要其恢復、則先可教忠自眼正、眼縫若綻、則隨分接得一箇半箇、未晚也、若宿福會合、衆緣輻輳。則人天眼目、爲栴檀之林、麟鳳之數矣、有何不可、其恢復之易成、如取寓物焉、或令宿福衆緣雙闕、亦忠之所在、道之所在也、道之所在、宗乘之所興也、此計成焉、已久之、唯忠信根微劣、業力深重無一能之。下略

と此章誠によく禪師の根本思想を窺ふに足るものである。夫れ世を救はむと欲せば先づ自己を救ふべきが如く宗門の恢復は自家裡の恢復である。桃李言はざれども下自ら道をなす。道眼明なれば一切衆生悉く度し得ざるものはない。要は只自性を見得するにある。「不識本心、學法無益、若識自本性、即名丈夫天人師佛」(六祖坦經)と五祖演禪師が慧能に謂へる如く、自隱が縦へ紫衣の大和尚たりとも見性せざれば余に於いて小僧となすと云へるに等しく宗門の生命は見性成佛にあると申されたのである。然も宿福衆緣雙闕ならしむるも亦忠の在る所は道の在る所ならん。道の在る所は宗乘の興の所ならんとは實によく禪師の慧眼を裏書せしものと云はねばならぬ。又次に、

忠亦能知引言箇佛字、拖泥滯水、言箇禪字、滿面慚惶乃經記而終歲、遨頭而過時者、禪之魔道也。

忠能知見處偏枯、自立自執、相應少分、自足自休者、禪之外道聲聞也。

忠能知雖有正因、而不廣尋經錄、不徧求師友、自失趣向、不知所以出、或止于讀誦者、禪之亂意也。

忠能知有正因進修、而止有所得之地者、禪之座主也。

忠能知不具正因者、止于出入馬史漢史、綺章繪句、驚人自怡者、禪之儒生也。

と禪の魔道、禪の外道聲聞、禪の亂意、禪の座主、禪の儒生なる五種の禪病を列舉してゐるが之れ又時弊を論ぜしのみならず末代の龜鑑である。かくて又云ふ。

忠之知也、如此之徧、而自家裡可辨者、未能辨之、則望王臣僧錄司之事、不可得行者哉。

下略(同上)

と記して澄水和尙の懇請に應ぜざる理由を述べてゐるのであるが此處に師の一半の根本思想を窺ふ事が出来る。卽三十五歳の時「奉呈太嶽和尙」に、

道忠斗仰道聲、欲一爨飯參承焉尙矣。丙寅歲適值和尙應一衆遴選、視篆乎法山、忠竊喜比宗
杲坐俟得天寧也、丁卯春、忠代人就副司寮、因獲日夕親近、優柔厭飲乎濟洞一家舉唱矣、和
尙、特賜收錄、辱授以洞上宗旨、疎山明安秘頤焉。示以疏剔大慧、覺範、雲外、東陵道元無盡
謙宗、近代永覺諸老之所見、而大成曹山之意諸訛焉。霑慈暉不一矣。及事辨、焚栢於座前、
展禮敬。聊作數偈、讚嘆自喜、伏冀喝政。(照冰堂詩集四卷)

と之れ太嶽和尚に末後の秘奥を得たる六月二十一日の記である。其偈に曰く、

其一、憤激衰秋警外求、單々率領揭宗猷、龍天湔祓耳鳴德、推出法山最上頭。

其二、頂謁特將目熟容、放開壺奥說重々、新豐法藏自然到、免得潛身盜祖宗。

其三、明安佛法托浮山、極得洞家途路艱、今日日東多不讓、傳他妙旨在人間。

其四、五家宗唱殆泯然、莫怪炊巾展前、何幸小根霑密授、驩虞宿世具因緣。

其五、「讚入道元罵大慧、謙宗破省燈、和尚出于數百年後、遊刃於肯肇、而徹見大慧省燈、不

必非、而道元、謙宗唯半邊、渙然妙合地曹山玄旨天矣。」

双徑吉祥不共歸、省燈種月競光輝、樓翻擔板視全象、獨許松岡老甚衣。(同上)

是の如く濟洞二宗の秘奥を遺る所なく傳授せられ何の幸ぞ小根密授に霑ふ驩虞す宿世因縁を具する事をと歡喜愉悅する所ありしに拘らず道業未熟の故を以つて澄水和尙の請に應ぜず。更に聖體長養専ら經錄に眼を洒し旁ら疏述を事とされしは正に師の根本思想たる宗門の興隆は自家裡の恢復にあり自家裡の恢復は綿々密々半斤鐺内に野菜根を煮て日を過すとも佛祖不傳の妙道を胸間に掛在せしむる事にあるとの意である。

然らば此に疑ふ所以は綿々密々行業鈍一をもつて宗門の興隆を期し得るとせば何が故に孜々として著述に没頭されたかと云ふ事である。今「答通玄座元」の書を見るに、

上略古謂化當世、莫若口、傳將來、莫若書、豈吾倫之所可幾哉、唯竊觀當代、教肆談、教稍入微者多矣、禪闍唱禪垂接度之手者、自家著貼肉汗衫、非主宰爲主宰、指戶口爲堂奧、古佛所呵斥率男女、在魔隊、教人公然著書擡禪宗、職此之由也、噫澆末之候、固可悲泣、

……中略

夫教育家之興隆、我不知之、禪宗之興隆、唯憑有實參實悟人、大凡不由悟明、談玄妙妄覺耳矣、南泉道、知是妄覺、不知は無記、豈不然耶、玄沙道、自家幸有此廣大宗風、不能紹繼得、更向五蘊身田裏作主宰、還夢見麼。(照冰堂虛癡集卷十七)

此に於いて吾人は禪師の根本思想が那邊に在るかを知り得らる。詢に當時は鳳潭ありて禪宗を罵り儒者も亦佛教の戸口に在つて堂奥となし教界の墮落に言を托して釋氏を論難したのである。然して其擡られる所以のものは此に師の言へる如く教肆に教を談ずる者は多く又衆を領し徒を匡して度生の手を垂るゝ者あるも大力量の人なく、少を得て足れりとなし羊燈を掲げて狗肉を賣るの天魔外道なるが爲めである。此獅子心中の蟲を救ひ宗門をして再び古に復せしむには先づ以て時代の潮流に竿し考證註疏の學を籍り來つて知は是れ妄覺不知は是れ無記なる事の自覺を興へ而して佛祖的傳の廣大なる宗風を後昆に紹繼せんとされたのである。之れ誠に禪師本願の致す所にして又能く時宜に適したる活手段と云ふべきである。

三 禪師の學風

凡そ學風は師事せし人のそれを繼承守株するか然らざればそれを發展して己れの學風とするかの何れかであらう。然るに無著禪師に於いては師事せし人が多人數であり、従つて其研究も和漢の諸學派に亘り、加ふるに濟洞二門の蘊奧を窮盡せられるを以つて今之を決定する事は容易でない。否むしろ師の學風は諸子百家の説を打して一丸となし、それをして悉く自家藥籠中のものたらしめたものである。換言せば徹底せる禪的信仰に立脚し百論千説の一切を取り來つて性地を資發するの指針たらしめやうとした。更に云へば百家異道の學は只是れ指月の指であり、鼓門の瓦であるとされた處に彼れ獨特の學風がある。従つてそれは學風と云ふよりも宗風と呼び禪風と云ふべきであらうか。「與祖印首座」の文を見るに、

凡學道之士、涉獵百家異道、也不足怪、只志趣、宜不同諸俗也、禪徒看閱佛菩薩經論、也
不足怪、只志趣宜不同教人也、所以不同者何、在資發性地而已、遂不見名相矣。古昔南
陽、馬祖、藥山、黃檗、豈不看經耶、但不若當時禪徒、畢生刺腦於教綱、而長無明、充學
佛者也已。(虛凝集卷十六)

と云へる如く師は飽迄禪徒の自覺による宗風を以つて學道の規範とされてゐる。即ち南陽、馬祖、藥山、黃檗祖師を假り來つて當時の學徒が典録を閲するに當つて性地の資發に充てざるのみか畢世

教綱を亂し無明を長ずるのみなることを誠しめられたのである。従つて師の主張は教相を學んで教人に同ぜず儒を修めて儒臭を脱し、且つ禪に徹して悟臭なく、襟度廣濶にして公平無私、清濁合せ呑むの妙道である。故にその尊ぶ所は常に公明正大、行履明白にして公論を以つて天下の大道となしてゐる。

『與祖圭書』に曰く、

夫公論者、充塞三才、如日月麗天、雖聖賢無之能易焉、苟胸膈有一物可護惜者、則分爲彼我好惡同異長短、自礙觀察之智、不知理之所在、有所責而不當、有所褒却爲貶、云云

(照冰堂文集擇省二卷)

是れ儒墨の大同思想に似たる如きなれども此に云ふ公論は六祖の所謂不思善不思惡正與麼の當體であり、諸縁を屏息して一念を生ぜざる一心性海を云ふのである。故にその廣大無邊なる事は三才に充塞し日月の天に麗くが如しと云ひ其眞實妙有なる事聖賢も變易する能はずと云ふてゐるのである。又師は『建中説』を作つて曰く、

出家兒、割愛而披緇、猿雲涉鯨濤、挈々砧々、敢於求法、雖到住菴、終不荒廢、竹之擊、樹之倒、慶快平生、悟而後已、甘蔗世間解、科十六之度、而精進皆居其一、其不可闕惕厲也如此、譬若撐上水船、一篙不容緩、然而執之不知蘇息、還喪心志、權衡折衷、正足成美

矣、中略在易大哉乾乎、剛健中正、純粹精也、今假文於儒、而發義於我云云(葆雨堂虛凝集卷十二甲戌)

と此處に於いても亦其主張する處を知る事が出来る。即持するに剛健中正を以つてし教ふるに精進を以つてしてゐる。且つ文を儒に假つて義を我れに發すと云へる、實に師の學風にして彼が典錄を考證註疏し珍奇の書を補寫校訛されし所以にして文を儒に假り經錄に假りて義を己れの宗旨に發せんとされたのである。

更に師三十九歲「答師默首座」の文に記せる五説を介して師の學風を見やう。

不佞年不高、而學無異、其混衆底、而泯々作息者不佞本分也、不可雜還多衆於年未高時、縱姿詭行於學未成之際也、管幼安言曰、潛龍以不見爲德、言非其時、皆招禍之道也、此一之説也。

不佞自能知德之涼、言之微、不足以取焉、縱有所果説、未必自是、類戴逵造像竊聽路評、雖如示於人、實問於人也、古曰、不自滿者受益、不自是者博聞、譬之江津在卑會之、其丘陵高原者、豈水之所趣耶、若許四衆來集、則如自爲有可取者、如自爲有可取者、則是不佞爲丘陵高原也、水無逆上之理、豈遑語深廣耶、若唯對寡集則是居下而如缺、曲有誤周郎顧、江津之深廣或可期、此二之説也。

交遊特請者、皆醇於向道、無枝葉處、可傾倒心腎、以親密之説、駕醇向之念、雖人之寡、

所利安之夥矣、抑廣衆則難得盡醇於向道、故所說必泛爾、所說泛爾、則所益亦隨薄矣、非唯所益薄而已、又不能待彼醇向者、以親密之說、此三之說也。

夫小時了了、不若耆年愒々、今時諸方躁進之徒、有少聰慧、途聽幾部經論禪錄、遂途說於衆會中、紛紛漫漶、都未有漸染修養、只規利名到于前、安知風教弊于後、損自害他、佛法年々見曠墜、此大可惡也、不佞何人欲矯此弊矣、屏來書者、可徵不規利名也、與道伴琢磨者、漸染修養之道也、古云、寧爲闖摧玉折、不作蕭敷艾榮、此四之說也。

夫吳楚僭號稱王者、漢儒之所責也、老成博洽、若某若足下、皆藏爪牙、惜羽毛不佞獨據寶華王座、非潛何、譬如善謳之韓娥奏一青敢不曼聲撫節而推出不善於謳者、而令強發焉、不蓋死者幾希、此五之說也。(葆雨堂虛凝集卷十五辛未之書)

以上の五説は或人の誤解を匡さん爲めの書と思はれる。蓋し師は已に學匠として又宗匠として一般に認められしに拘らず道場に衆を領せず講堂に學を講せず只眞摯なる者兩三輩の爲めに祖録を提唱し詩文を談するに過ぎざりしを以つて或は偏狹と呼び或は奇屈と罵つたのであらう。照冰堂紀年録を見るに「師二十八歳爲雜華春首座講大慧書」とあり、又師三十六歳の時には「戊辰之夏、法嶠之兄弟、建會於龍華、令幹其盡、以計辨道修學矣。(葆雨堂虛凝集三卷十一丈)」とある如く三五輩の爲に親密の説を傾け、時には遠來學人の爲に連日心腎を傾倒して向道に盡醇してゐる。更に六十九歳には

『二月三日龍潭開勅修清規講筵』、約四件法書貼門着。……四月二十日清規講畢、二十一日竹杖草履、歸龍華』(紀年錄)とある。此時の科約とは、

一、不納贊禮、一、不受檀施、一、不接客訪、一、不許方來相看、只要略世情、養恬靜、保攝衰軀、成辦勝會幸已、

衆悉

道忠白

にして此科約は常に龍華院の玄關に貼付して面接に應ぜず院裡に蟄居して著述に閲書に精進されたのである。是の如く禪師の學風は飽迄名利を厭離し剛健中正、公明正大、向道に盡醇し苟も開口弄筆すれば必ず性地の資發を捉し宗門の興隆を以つて本分とされた事は明である。

四 著述家としての無著禪師

以上に依つて略禪師の思想を窺ひ得たが更に師が宗旨闡明の根本思想に立脚して畢生の努力を傾注せられた一面は此に云はんとする著述家としての無著禪師である。曾て松本博士は禪宗文學なる論文に於て

無著道忠禪師は嘗に我國に於てのみならず支那印度を通じて古今の佛教界に於ける類ひ稀なる大著述家であつた。否嘗に佛教界に於てのみならず東西を通じて一般學界にあつても匹儔罕なる所と云つても差支なからう。中略余輩はかつて筑前宗像神社の傍にあつて平安末期より鎌倉時代の

初に涉り一切經六千餘卷を獨力を以つて筆寫した色定良祐なるもの、精勵刻苦を驚歎し信仰の力の誠に偉大なるものあるを見た。確に之は人生に於ける一の奇蹟であるが今道忠禪師を以つて之に比するに又殆んど之と相均しいものがあらうと思ふ。固い禪師の著す所の六百六十卷を以つて一切藏經の六千餘卷に對すれば僅にその十分の一に過ぎぬが、良祐は單に之を筆寫するのみであるから船中にあつても行路中にあつても猶よく之をなすを得た。禪師の著す所の多くは考證編纂であつて決して單に筆寫する如き容易の業ではない。若しその勞力と時間とを以つて之を論ずれば良祐を以つて禪師に比するは尙其れ足らざるを覺ゆるのであるが兎に角之等は共に我佛敎界の產出した大偉人と稱するに何人も異議を挿むものはなからう。著述の多い事を等身の書といふが今假に六卷を以つて一尺とすれば六百六十卷は正に一丈一尺となる。是れは普通人間の足を聳て手を舉げて尙且つ達する能はざる所である。(正法輪大正十二年一號所載)

と讚歎してゐられるが此れは吾人が一度龍華の書庫に入つて現存書僅に六十二部三百四十六卷を見るも丈餘に及ぶに於いて更に驚歎せざるを得ないのである。

さて法孫妙卓の編した葆雨和尚撰書目録には一百八十部六百六十一卷を載せてゐるが龍華院所藏現存遺著を調査比較する時は自撰書目録所載外に更に二十九種五十三卷を見出すのである。尤も此中には稿本のもの未完のものもあるが之を通計すれば二百〇九種七百十二卷となる。今之を註疏

類、考證類、史傳類、語錄類、詩文類の五種に分類してその思想を窺ふて見やう。

(1) 註疏類の撰述は凡そ五十七種二百十五卷にして撰述中部數卷數共に一位のものである。而も主とする所は虚堂錄犁耕三十二卷、正宗贊助桀二十卷、百文清規左臈二十一卷、大慧書栲栳珠十六卷を初め臨濟錄、禪儀外文別考等濟門七部の書である。之に依つても師註疏の目的が那邊にあつたかを知る事が出来る。云ふまでなく根本思想が宗旨闡明であるから虚堂祖師の流を汲ひ者として先づその註疏に着眼されしも當然であつて之等先徳の語録を窺つてその自受用三昧なる大機大用に接すると共に之等宗學兼備の祖師が如何にして宗門の興隆に盡されたかを知らむとされたのであらう。虚堂の文を評して曰く、

余乃今知、古人文字、始終開闢、有宗有趣、其不苟如此。

と歎じ且つ虚堂に徽號なき事を評して、

噫無德者、討徽號、而世人不識之、纔諷經回向中、維那口裡囁嚅而已、如虚堂、愚夫春婦、

貴賤尊卑、無不知者、其大德不可掩藏、自然之理也。(虚堂錄犁耕總論)

といへる如く虚堂の高徳にして且つ高潔なる事を讚歎されてゐる。又希叟紹曇の著せる正宗贊を評して、

禪祖禪文、上堂小參拈古頌古等諸錄皆然、至佛祖贊、贊正宗祖師、一人二人三五人、亦在未_レ有

四六八對、贊五家名師、不遺作一家言、如此書者、況希叟具抑揚眼、鑿內外學、應其德量風裁、下語恰好、自非眼光赫爍、學海渺瀰、烏得縱橫如是、可謂雅思淵才、實未代禪讚之榜樣也。(正宗贊助築總論)

と記せる如く一には希叟の抑揚自在なる宗眼を賞し一にはその學海渺瀰にして雅思淵才ある事を歎じて後世の龜鑑なる事を證してゐる。その他大慧書百文清規何れも宗門の要書にして、百文清規の如き

山野於此書、非曾聽人講說、又非從先輩釋疑。

と云へる如く先人未講のものと雖も苟も宗義の闡明に資すべきものは禪師自らの炯眼に照して註疏されたのである。又彼は清規を以つて「佛制之變也」と定義して戒律の重んずべきを力説してゐる。

左觸緒餘の斷吻に、清衆匪懈、魔障絕迹、全軼業卒、懽喜無涯、但多日蕪說、足瀆衆聽、爲奉詳細演說、請每常坐久成勞、加之病多口吃、聽瑩乎枝言、又校書、如掃殘葉、雖謁綿力、豈能契玄意哉、況手該括之才短、而點檢之日淺、伏請楷正訛謬、而處々流通此書、清規行焉類綱振焉、叢林增光輝矣、珍重。

と云へる如く訛謬を楷正し處々に流通して清規行はれ類綱振ひ叢林の光輝を増さん事を念願してゐる。その他臨濟錄、六祖壇經、佛祖三經等の宗門要書は勿論、楞伽、圓覺、金剛、維摩等より唯識

法華、天臺、俱舍、因明等に至るまで之が註疏を作り特に洞派の所依とせる永平正法眼藏には正法眼藏拈鐔(一卷)正法眼藏校偽(二卷)を著してゐる。次に職原抄講錄一卷を著してゐる。職原抄は北畠親房卿の著す所で古代各官省の制度、法典、禮語の學である。「錄白井宗因之講說……宗因用中原家之說」とあるから藤原家に對して一家の學をなしたる中原康富の唱へし中庸思想による紀傳道であらうと思はれる。而も此講錄は奥に曰く「延寶二年甲寅歲七月十日於新在家、南町講畢、忠首座時十二歲」とあるより見れば已に此頃より一講を聽けば一卷となすの天稟の才を備へ、かつかゝる一家の學にまで研究の歩を進められし事は又以つて師の博學を證するものといはねばならぬ。

(2) 考證類に屬する述作は二十種八十一卷にして禪林象器箋二十一卷、禪箱事類八卷、閱藏疑證七卷等はその主なるものである。此方面は師の最も力を流ぎ又最も特意の様に思はれる。今其主著禪林象器箋の序文を見るに、

大凡佛敎儒典、諸子歴史、詩文小説、目之所及、意所詣、遠蒐近羅、或對斜陽、或挑殘燈、多累歲月、稍覺無遺漏焉。

と實に卷首の援書目錄には經疏八十七種、律九種、論十三種、漢士撰述經律論五十五種、僧史類二十種、禪史十九種、禪錄百十八種、禪文五十二種、傳並行狀十九種、禪集五十一種、清規三十種、外典にして經に屬するもの易詩等十二種、左傳宋志傳等の史類三十七種、子類五種、集に屬するも

の三十四種、襟類百九十四種、和書四種、合計七百七十五種の書を考證してゐるを以つてしても其努力の絶倫なるに驚かざるを得ない。而して師が此著をものせし所以を次の如く云ふてゐる。

五葉結果後、稟承祖胤者、多附居律寺而已矣、百丈和尚創意而設禪居、震耀儀表規矩、以謀令法久住、乃觀有師徒焉、有堂舍焉、有禮則焉、有器服焉、以義定名。論云、語於名轉名於義轉、名義既概矣、須是紬釋其義、而發明其名也。

之を見るも亦師の述作清規に於ける思想を窺ひ得る。即百文祖師の意を假りて宗義を宣明し令法の久住を計り宗門之興隆を期せむとされたのである。而して此書の如きは師の天賦の穎才と不撓の努力と稀に見る長壽とを以つてし尙且つ炯々たる法眼を具して初めて大成されたものと云ふべきである。次に閲藏疑誤七卷は五十八歳より九十二歳の終焉に至るまで經、律、論百七十二種、二千八百十三卷を看讀朱點し訛誤は之を正し脱文は他書より引用挿入し難讀の處は朱書にて訓點を施し、重復の處は之を明記したるものなれば黄檗板藏經看閱者の爲には必須の書と思はれる。又讀書辯音一卷は多年閲書の際誤り易き慣用語の音韻、例へば平聲を去聲に、去聲を平聲に讀むべきものを摘出分類せし如く古字の通用を辨じたるものであり、更に日本物語義六卷があるに於いては如何に一言半句に至るまで綿密なる注意と努力とを惜まれなかつたかを知る事が出来る。尙師の考證された論文中に「辨色定非安覺」があるが之には容易ならぬ努力が拂はれてゐる。師の隨筆を集めたる萬里

砂第一卷には「色定法師寫藏跋語」、「色定考年圖」、「野間三竹書色定爲安覺事」の説を戴せてゐる如き一論文を作すに對する用意の周到なる事を見るに足るものである。又「大佑妄議百丈清規論」に曰く、

淨土指歸集曰、百丈大智禪師、以修禪之人、附居律寺、紊師徒之分、是故建立叢林、以清規繩之、自是天下始有禪居、凡病僧危篤、集衆與之念誦、其詞曰、諸緣未盡、早遂輕安、大命難逃、徑生安養、其爲亡僧龕前念誦則曰、神超淨域、業謝塵勞、蓮開上品之花、佛授一生之記、至茶毘時、令維那與其十稱西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀佛、大衆同聲應和、而又曰上來稱揚十念、資助往生、津送住持之法亦然、此法載于清規、雖叢林老宿、道眼明白者、無不遵之而行、故知合五家之宗派、盡天下之禪僧、悟與未悟、無有一人、不生淨土也。止此道中謂……中略……佑言曰、雖叢林老宿、道眼明白者、無不遵之而行、故知、合五家宗派、盡天下之禪僧、悟與未語、無有一人不生淨土也、止此渠以清規稱彌陀極樂、遽欲籠罩百丈已後、五家宗師、天下禪僧、決證穰病送亡、歸依此法、念彌陀往生極樂、容德山臨濟、亦在裏許矣、噫上古禪錄、不多見念彌陀、永明壽公、憐未代劣機、遂有禪兼淨土之說、譬如敎家之談、有敎道有證道、然證道未必歷階級焉、如今清規比諸敎道、不可不依通法、悉設之、雖然設之、非天下禪僧、盡依用、如煎點、笑蓉楷省而不講、如唵儀、大川濟願命令勿厚、

如嗣法師忌、巴陵、大川、橫川、僉不墮清規塗轍、固不同佑之槩論矣、大抵有一類念彌陀者、昏于根源、外觀禪宗向上作略、內視念佛下機弄引、而妄生人我見、存嫉忌意、以謂彼禪宗、雖抑下我家念佛、然彼亦有念彌陀者、遂繁援歷代禪祖、念彌陀者、禪冊遇念彌陀文、則喜以表章之、以謂彼稱念我家彌陀佛、是即彼隨順我往生淨土教矣、嘻釋迦慈父濟度方便、十百弗管、而念佛之教、居其一、又說念十方諸佛之法灌頂往生十方淨土經而彌陀居其一、然則是釋迦法中念佛、大凡禪教佛弟子、具其機者、皆須仰而遵奉矣、大佑以爲獨我宗念佛、何得偷常住物、爲自己受用、可鄙也哉、佑曰天下禪僧、悟與未悟、無有一人、不生淨土止此熟察佑之是言、渠本不識彌陀極樂、至竟爲何物、我今依了義、告汝、含靈具有法界體性、分正分依、爲彌陀、爲極樂、所謂己心彌陀唯心淨土也、經云、生者皆是阿鞞跋致、阿彌陀經得無生法忍菩薩、名阿鞞跋致、智度論是故可和、天下禪僧唯明悟者、方可得生彼、其未悟者、難爲誕彌矣、豈得悟與未悟、雜還纏至耶、若復明悟者、不著土、不愛佛、正足稱見道阿鞞跋致焉不見般若經云、於佛所取相皆名執著、大般若五又云、凡有二者、無道無果大品二苟眼見佛、脚踏土、詎爲非有二有相哉、余嘗聞極樂國無四惡趣、無四惡趣者、由破見惑、見惑破、則人我不存、即可反顯人我存者、不得往生樂國矣、如佑則累聳人我之山、吾於四惡趣、有望焉、於極樂國、絕望焉、復次彌陀佛人也、極樂土境也、禪宗有說云、有時人境俱奪、有時人境

不俱奪、若是不俱奪時、頂禮無量壽、展開清泰國、若是俱奪時、喝散無量壽、踢翻清泰國、那時大佑輩、須臾若於後而已、又觀淨土指歸德祥跋語曰、僧錄右善世啓宗法師所編、蓋啓宗大佑別號、已稱法師、明知是教僧也、若復非教僧之旨於禪宗者、曷以加輕侮、之如斯哉。

と此論固り淨土指歸集の訛誤を正すに禪の念佛觀を以つてせられたのであるが又能く禪師の根本思想を窺ふに足るものである。

(3) 史傳類には十三種二十六卷の書があつて其主なるものは正法山誌十卷であらう。此誌傳類に於ては關山授翁より歴代傑出の善知識の傳を、又王臣にては武田一族との關係、信長信忠の交渉、法山寶庫の書畫とその人物考を、堂塔伽藍に於ては法山の建築より塔中末寺大山の寺記鐘銘を戴せてゐる。尙近代禪匠の史傳逸話等は延寶以後の僧傳を知る絶好の資料であらう。其他日本禪僧漫錄一卷、黃檗外記一卷、日本釋教通鑑考一卷、僧史料三卷等は共に好參考史料と思はれるが遺憾乍ら今は所在不明である。是の如く苟も後世に傳へて益ある事は精力を盡して之を集録し又更に古書珍書出する時は必ず傳寫の勞を惜しまれなかつたのである。「記寫春秋左傳評苑事」には、

儒生可準、澤爲氏、丹後州人、曾遇於龍華、偶借左傳評苑於尾州儒士、特稱珍秘矣、余與可準謀分手而寫之、或對杜註或對林註、而略其同文、偏貪功程、庶幾全備、甚至略字之偏

房、欲俟後日、補填之、于豈寬文九年己酉、自夏四月資始到秋八月、彼此寫者、合三十卷就緒矣、余時十七歲、每日奔講肆、歸時則鳴筆硯、十一年辛亥某月、更取澤氏所寫而書之、到秋月朔日余本全成、爾後不遑補置闕略、廢棄四十年、後惜後之人、無所甄別、而前功歸烏有矣、乃趁間暇、取杜林二註對校稍填其空闕、然爲書浩繁、難容易成、又可準所寫、脫略音切、字數不足、有不可補者、以爲遺憾焉、此註於林堯叟、更加委曲詳明、太便手覽、唐書之肆、未再見之、後賢或獲遇斯注解、彌縫一遍爲全書、則幸甚、寬永七年庚寅仲春二十七日照冰堂主漫識。(虛凝集卷十三ノ七文)

と記せる如く多年の歲月を費し精神を勞盡して卷と成し後昆を裨益せんとせられたのである。

(4) 語録類には正法山列祖語録一卷葆雨和尚語録四卷等がある。語録とは云ふまでもなく禪僧の應機接物、爲人度生の日常行履を録せしものなれば詩文論說の如き文學的價値は少なからむも宗匠としての人格的價値は其接化に臨んで如何に殺活自在なりしやに存するのであるから其人の宗教的價値は一重に語録に因つて窺ひ得るのである。恰も宗祖臨濟和尚の宗教的價値は臨濟録一卷に存して史的考證の如何は第二義的價値と見るが如きである。此意味に於いて葆雨和尚語録の失はれてゐる事は惜しむに餘りある事といはねばならぬ。

書新鐫臨濟語録後に曰く、

此箇一縛、我家青氈、舊刻迭出、盤踞焉、祖庭闕典、竊以爲惜、精楷新寫、黜訛完繕、校讐反復、誠肆入鑄、升平快事、曷用加旃、遂託副墨、謹白參玄、合掌一覽、行脚十年、孤明歷々、透霄徹泉、行業純壹、汜可犯邊、過此已往、火中開蓮、具過師眼、掉打爺拳、葆雨堂主道忠拜識。

と是に依つて禪師が精寫校訛の努力を重ねて刊行せし所以は後學をして心地入路せしめ以つて師に過ぎたる法眼を得せしむるにある事を知り得るのである。次に薦導語林の書後を見るに、

此書本、出于東濃可兒郡桂林山見性寺古紙堆之底、山主天啓座之丁巳之秋侍于霖翁和尚住法山、而西上、一日携來示余、余覽之、皆是中古名德、送亡薦語、大以爲珍奇、遂從事筆硯、舊本每師之語、前後交雜、今編次而類集之、凡於熟語、有訛脫、則亦竭力補正、又吾景悟特東語錄西川語錄、横川京華集等遺漏者夥矣、今省其所戴、而採不戴者、及語之略者、自十二月十二日、資始到、閏十一月十八日擲毫、二十九日校讐畢、却納元本云、元本但題以雜集、余改名薦導語林矣。

と記してゐる如く苟くも珍奇得難きものには寸陰を惜んで筆硯に従事されたのである。然も此書の如きは「元文二年丁巳仲冬霖雨無著叟識」とあれは正に八十五歳である。老境に到るまで孜孜として精進せられた一斑を窺ふに足るものである。

(5) 詩文類には二十七種七十九卷あるが現存するものは葆雨堂虛凝集二十一卷、禪文格六卷、翰苑四錦段三卷等の五六種に過ぎない。然して葆雨堂虛凝集は師の詩文の粹を抜き短長の論文、說辨より傳記、塔銘、題跋等に至るまで載せてゐるから文藻詩藻を窺ふに足るものである。葆雨堂虛凝集の己菴原資の拜題を見るに末尾に曰く、

前略於是西鄉颺言曰、郁々手文哉、肇嵩既邈、範不在茲乎、抑大音希聲、孤絕而莫嗣邪、將有鑿乎鼓之、軒手舞之者邪、蓋師、衍於道、而寓諸文、讀斯文者、宜於道求之云遂戰兢爲序。

とある如く天賦の文才に加ふるに博學廣識を以つて文をなすが故に後人の範となるのみならず宗旨に出るを以つて求道者を戟するに足ると思はれる。尙純粹なる詩書としては禪文格、翰苑四錦段等がある。助字品彙の例言に云く、

一、予自童穉、每閱書典、遇助字、則鈔錄、今歷數十年、積而成卷。

一、今文不可叨用古文奇異助辭、然今悉收錄者、貴其博者也。

一、授書不必取古擇今、但隨經眼鈔記去、或又欲見用字之法、故不營新舊正雜而已。

一、縱有和訓同者、當隨字而義別矣。(助字品彙)

此例言に依つても作文に對する用意を知り得る。彼は又元祿の頃院内に水乳社を組織し同志を集めて詩文を講じてゐたが元祿二年己巳の初冬に禪儀外文を講じて後、虎關の文を評して曰く、

虎關拔_レ儷語華、金科玉條、龍種著_レ左補衣、內秘外現、聞_レ四六文章談作、示_レ副貳傳化道然、代_レ舌將身、激_レ儒立志。(孫雨堂虛齋集十四卷四十九文)

又禪儀外文講了を賀せし社中に答へし文に曰く、

社中兄弟禪師、牖中窺_レ日、水上觀_レ瀾、治_レ禪文得、離_レ禪文看、雪珠盛_レ銀碗、授_レ儷語了、作_レ儷語賀、霞衣襯_レ霓裳、元氣或回、後世可_レ畏、藥山牧_レ十箇、衆貴_レ眞實、不_レ勤多、董遇惜_レ三餘、學忌_レ因循、不_レ厭繁、永修_レ同心好、卒酬_レ合掌文云(同集同卷五十文)

右の二文に於て師が詩文を修め之を講ずる所以を窺ひ得ると思ふ。蓋し四六文章の談起ると聞いて副貳傳化の道然ことを示し、舌に代るに身を以つてす儒を激して儒を立たしむと云へるは虎關の文に寄せて己れの意圖を演べたものであらう。又後の文に於て禪文を治し得て禪文を離れ看ると云へるは社中兄弟の讚辭に非ずして詩といひ文といふも皆是れ化度の方便である。藥山が涅槃にさえられずして閱藏六度せし所以を叙せられたのであらう。

五 禪師の文藻

更に禪師の文藻に就いて論せんか。惟ふに天稟の才を緯とし博學廣識を以つて經とするが故に文は韓柳に比し、詩は季杜に比し得るであらう。

師六十九歳享保六辛丑年六月八日の記に曰く、

訪東禪寺已菴於京肆之邸爲瑞世上京已菴勸諭師令刊師詩文、春甫院太初、在座、菴語太初曰、無著和尚所作之文、虎鬪不如也、義堂、絕海、不待論、彼師亦不可自知之、公之輩、可以常々觀之、唯是有知音者、能識之、及和尚百年後、必有無涯光明耳、如此評論、唯我能爲之、世人恐不識之。(照冰紀年錄)

これ當時詩文に長じたる物徂徠の門下にして禪門の白眉と云はれし已菴原資が評論せしを以つて見るも師の詩文の全豹を見得ると思ふ。詩文集としては葆雨堂虛凝集二十卷、葆雨文集擇省四卷、照冰堂詩集七卷、萬里砂五卷等にして何れの詩文をとるも其博學と天稟の文藻に驚かざるを得ないのである。

(1)詩藻 師の慧敏は幼少の頃より已に神童を以つて稱へられた所であるが詩藻に於いても亦全く天才的であつた。曾て六歳の時「有幡州醫師立庵、因事來于豊岡、授古詩於師、試敏慧、詩曰、網裏無魚欠酒錢、酒家門外口流涎、幾回欲脫簑衣賞、又恐今朝是雨、師承讀無滯、立菴賞歎」(照冰堂紀年錄)とある。次いで十歳の時初めて歳首の詩を賦す曰く、

暖風吹起祝良辰、再遇龍華會上春

回首朝來空十歲、何時學道得光新

此詩數字の添削ありと雖も處女作といへば如何に詩才の天賦なるかを知るに足るのである。後遇々

清僧良行なるもの黄檗山より來り竺印師に見えし時、師をして此詩を書かしめしに衍大いに賞し席上に於いて和韻したと云ふ。之れより年々の吟詩積んで山をなし照冰堂詩集八卷となつて殘されてゐる。五言七言絶句を始め五古、七古、五言排律、七言排律あり間、六言排律あり、時には山中の静寂を吟じ、時には世相の紛々を詠じ知音に遇ふては吟懷を措しまず、勇健流麗、古賢を評し後昆を誡しむ。更に交情の詩に至つては温情溢れて面接するが如く故人を悼むの偈に至つては慟哭胸に迫つて鬼神を泣かしむる者あり、偈頌に湊つては巍々手として攀ずるに途なく祖を呵し佛を殺すなど千様萬態讀者をして陶然神仙の妙境に遊ばしめ又肺腑を刺すの思あらしむるのである。かく天才的詩藻に出づるが故に其詩風は何人を宗とせるかを明に知る事は出來ない。謂ふまでもなく當時は東山時代の所謂東坡山谷味噌醬油の風を受けられし事は想像に難くない。師が已に十八歳にして古文眞寶集解を述せし事にも知らる。師三十四歳の時「與某書」に曰く、

上略雖然中者巧、而終者情、復烏若初者瑰麗壯拔、而所謂傾湫倒嶽沾潑袈裟角之類耶、然而到謂新涼動座隅、竊惑焉、新涼者、秋初之涼也不可施於仲夏、時秋積雨霽、新涼入郊墟、韓愈句、一也、病入新涼減、詩從半睡成、陸放翁秋夜紀懷吟、二也、十分秋色重陽近、一味新涼老者宜、徐崇文詩、三也、若三證果是、則請改新字、然詩文亦不易瑕疵也、薰風多用于夏、而有徐夜言薰風者、黑甜晝寢之方言、而有五更睡日黑甜者、何孟春日、今人好以一字一詞之訛、

生「詢嘗」、若質於考古之士不知答當誰歸。云云（葆雨堂虛齋集卷十五ノ二文）

と記してゐる。之に因つて師の詩に對する博學なる事と後生に對する親切とを見る事が出來ると共にその造詣の片鱗を窺ふに足ると思ふ。其詩に曰く

賦山中歌

曾聞山中月、未見山中月、今對山中月、初知山中月。

上虎溪

溪路幽深絕世塵、我來未見境中人、松風水石誰成趣、五老峯頭月半輪。

長春迎春

在々江山在々春、異鄉物色帝京身、一機轉有新年別、消盡冰心同世塵。

題明石浦月照寺 人麿

春風月照樓、訪古事緒悠、華表迎淡浦、靈祠送島舟、讀碑行不盡、題句意猶求、仰瞻歌仙德、盛名千歲留。

春 睡

湘水東流不復廻、百年心事鏡中催、強求机几貪春睡、何忍幽措雨灑來。

荷沼送涼

無著禪師の思想

綺綵中堂坐竹椅、近檐畏日不應推、自開寒玉兩三曲、更貯翠盤千萬枝、當午生風甍困醉、有時翻露警盈持、滿身涼冷兼芬馥、砵兀火雲空倒欹。

歲暮咏懷

市較錐刀聒、寺含暮景間、近青苔活砌、遠白雪粧山、冬暖寬梅放、林深納鳥還、聰明多挫辱、不必賣癡頑。

仲秋無月

月華空負仲秋名、雲霧深關不漏明、猶待淨氛風將出、半宵兀坐伴蟲聲。

雲

片々御風自在飛、無心成狗又成衣、滔々人生混炊累、去彼帝鄉誰與歸。

山居

溪聲談法谷空聞、自散胸中人我軍、三尺茅簷無定主、半床明月半床雲。

祭菅君靈祠

風雅界中舊主人、挿梅粧點海東春、靈蹤難望經嶠月、天曉露清菩薩巾。二十三歲天神獻詩二十五首ノ中

老意

睡少如年待曉鐘、舌亡滋味懶挑葑、西南東北交游盡、知我後凋庭際松。

示「豐吉」

交朋須有信、事主莫遺忠、方寸存誠意、吉祥在厥中。

遇「八十四歲春」

梅開磬口柳依依、深戶春臨雪、自笑六旬蓮白玉、又知二十四年非。

謝「龍華院事」

五十年間守敝廬、不修檀越一封書、肩衣口食天然足、今日還爲脫鱗魚。以上十六首虛癡集所載

送「祖圭行警策」

空手三年下寶山、再歸受業又何顏、畢世不本廻光學、管取啞羊鬢髮班。(照冰堂詩集所載)

南湘院聯句

剝栗論「山味」無著烹茶破「月團」甲檐間窺「寂雀」乙井底秘「靈鱧」無著金地世塵絕「甲銀河更漏殘」著

書燈吟未了乙文席興猶闌「甲梅放甲科榜」著(第五卷)椒攀「長壽盤」著

噉蔗軒主九十二歲謝「世於周州德山」寄「宇茶」賦「偈寓」悼

交情歷久多翻覆、知我如翁可莫倫、私弟論文周府月、公筵題句武城春、最憐一世風流士、長作九重泉下人、空有生前良覲約、手書連寄墨猶新。(同第八卷)

初祖忌

無著禪師の思想

晚風翻葉樹根歸、熊耳峯前絕百非、隻手輕々提隻履、西乾東土轉乖違。

成道忌

至尊堂上使人困、躍出全身黃闥排、却說從前麻麥餒、茫茫到處作羅齋。

和點禪見寄

我院君居隔一川、談禪論道莫間然、當來復有龍華約、數夢伴登兜率天。

鼻

面山路滑無人上、兩穴天窻自古來、往昔九成遺臭恨、夜深隔雪識梅開。

舌

廣長捷辯似河懸、甜瓜苦瓠隨類緣、傾盡醍醐真上味、誰圖火裡吐紅蓮。

憶友

素月玲瓏照古床、共誰一夜惜清光、孤琴寂莫無人弄、流水高山萬里長。

北窻高臥

初涼天氣北窻中、世人間萬事空、高枕一齕詩興多、覺來松竹送清風。

又

新篁搖翠午風微、獨愛北窓無暑威、移破蒲團伸脚臥、廬山入夢瀑聲飛。

隱逸

蓬戶雖非金玉華、侯門榮辱儘堪遮、棚頭墳籍五十卷、世外消閒一椀茶。

和點首座所寄 古風體

木其擗々、雪其霏々、龐壽之後、誰得此歸、有美人于河之滸、法空爲牀雲爲衣、曾餐幾多團明月、心々觸物發妙輝、應器綻兮老鶴唳、赤幡倒兮龍天違、出第二門、爲大息、第一門內本無盛衰大息夜來一碧水天色。

範上人初遊方作此叙書別一一有警語也非空文闕華藻者 三首ノ中

登歲亡師與我同、秋山落日世間空、風絲懸命萬鈞重、莫使魔群笑滿隴。

處々刹竿望水濱、衲僧行脚正斯辰、遊方秘訣無多子、下問不差切日新。

劫外道舊胃暑歸自武州予喜呈詩二絕兼求英禪共和焉、曩昔季清臣寄詩蘇轍又於詩後批云可求子瞻共和、蘇軾因共和焉、予謂清臣之舉匪雷令續千歲風雅美談亦足以見蘇氏友愛之情也、而今二公友愛過蘇家兄弟、故予有此請。 錄其一

相見先驚須髮長、病懷轉思兩相傷、今逃趙盾炎蒸日、宜對蘇州風雨床。 照冰堂詩集卷三

萬法師一

東關西路異山河、漁采農耕活計多、但仰中原天子化、不須特地執子才。 同集卷四

無著禪師の思想

(三九)

書山水附兄弟軸尾

堂裏峯生杳可望、何人潛負置滄浪、滄浪細視同圖畫、不怪風帆日夜張。

山妍長是春、湖潤不風皺、欲問水來處、汝還畫上人。

詩賦八卷を成すを以つて佳を選ぶ事を得ず手に任せて録せしも之に依つて大體を知り得ると思ふ。

(2) 文藻 に於いても詩藻と等しく天賦の才あつて而も經典祖錄より和漢諸士百家の書を讀破してゐるが故に長を採り粹を抜いてゐるやうである。のみならず湛然寂靜、皎潔恬淡なる道念に準據するを以つて叙事論辯正誥格律を存し流麗高雅にして勇健洒脫筆を下せば文をなし句を作すの想を起さしめ博學高識に出るを以つて論理正然として文意明白、讀者をして自ら襟を正さしめ且つ出據瞭然、故事頗出なるを以つて興味津々として倦む所なきの想を抱かしむるの感がある。己菴原資の虛疑集拜題に曰く

余及壯、知神雉有龍華無著大師者、仰之尙矣、時獲其文、捧而誦之、則皆華醇宏奧、表々藻々、斧宗猷者、雖混濛不可端倪、然亦識爲午百年、而僅者者、弟不能、一闕蕭牆、於邑爾、云云
又曰く、

爾來、師道聲倍鬯、著詠倍播、每有人問原資當今寓內苾芻、有卓識能文之士邪否、則先以師詫焉。

とある如くその卓識能文なる事は敢て己菴の讚辭に非ず、道聲と共に己に海内に名を馳せてゐたのであらう。『師四十三歳元祿八年七月二十四日、南部南宗寺江心座元上來、及冬歸國、告云、檀越遠江守好詩文、請寫得公文兩三篇、歸以爲贄、師固辭、江心、請不已、遂寫空華錄序、而與之又加以柳川萬英禪師文一篇、遠州參觀在武都、江心、呈二人文、遠州大賞之、別寫一本、示僧錄金地院寬長老、僧錄亦賞美之』と照冰堂紀年錄にあり、又同書五十二歳の項に『寶永元年夏有人携未央宮瓦鑄硯之銘、請讀法、蓋京都豪族、所秘藏也、師云、所寫有訛文、故其處不下國點、又請覽其硯、果有寫訛、蓋鑄漫難覽、放訛、時人、準道安讀鼎銘。』(僧傳第五、六丈)と記し、其他大阪那須心菴は書を送つて五酉事を問ひ又彼の著述新知論の文字の點檢を請ふてゐる。従つて三光國師の碑銘を始め塔銘行狀、傳、祭文、哀辭、鐘銘、記等に至るまで懇請黙し難く寸陰を惜み精魂を傾けてゐる。

雪州瑞塔山天長雲樹興聖禪師開山 兩朝特賜國濟三光國師碑銘

千光祖師回自宋、而吾曰域、有濟家之禪、道元祖師歸自宋、而吾曰域、有洞上之禪、二家始備矣、爾後聖一法燈大應三國師、相次傳心宗乎宋而歸、宋地宗師、迤邐入乎我者、有大覺宗覺佛光佛眼弘濟、世稱之傳禪十祖矣、當此時、吾國之禪法、若大陽之禺中、春芳之信雷也、宋地之風勵者、龍馳虎驟、吾土之傳化者、獅擲象旋、國濟三光國師、生而際于此時、更教入禪、

歷討二域、縱探於宿德、譬如遊龍宮蛟室者、五步掇夜光、十步擷明月、自富富人、何其盛哉……(中間凡略千五百二十字)文末の頌曰、佛性堂々、絕羅毅隔、宿慧囊錐、不滯言迹、圓明一顆、變世燈輝、慕問自己、豈知攸歸、曰國宋土、扣擊靡遺、爛嚼五味、知命不衰、楚江流合、避風用方、遡尋源委、岷山濫觴、補席鸞峯、瓣香致悃、或孤或賒、不知酬本、匪直翻本、蕙蘭臭同、無依露坐、洞谷異風、瑞現茗杯、游阿羅府、夢乞稻粃、排杵築戶、四會建幢、如電一掣、兩朝湛思、似劍一快、慈視國土、濟潤群情、日月星德、照波八紘、設利璀璨、驗定慧純、雄光及樹、三處分窠、去順世載、三百五十、獨雲樹塔、香火惟欽、宸奎崇道、墨澤不渝、神天呵護、四疆無虛、山門已落、佛殿將新、錄行聲頌、勤之貞珉、延鴻皇圖、尊遶祖德、地久天長、透母湮泐、正德二年、歲次壬辰、秋八月二十四日、前住神京正法山妙心禪寺、嗣祖比丘、無著道忠文、并書、篆額。(葆雨堂虛庵集十九)

此他、前與聖梅峯信和尚塔銘并序妙心三世無因和尚行錄、寂照法師別傳並附錄等何れも數紙を費し鐘銘に於ては巨鼇山海清禪寺鐘銘等數章を載せてゐる。

海清禪師鐘銘曰、序略之

鑠頌鈍 階精明 胚暉脫 鑿乳成 通身口 法雷轟 確錦雉 應華鯨
 警昏隱 報曉鏡 鬼掌合 客眠驚 步白道 離黑城 業輪止 性海清

巨鼈戴 三山橫 法幢建 輪業貞 禪誦節 集散程 間流入 空覺晴
明獨立 所不生 寂滅現 已通享 功德偉 眞俗拜 東道社 西宮榮
三住妙心現主龍華七十五翁無著道忠謹銘

尙祭文、哀辭三五に止まらざれども今一二を記して文藻を窺ふ事にしやう。

祭小師字海藏主文有序(今略之)

噫汝靈、孝弟成性、謹幹無倫、剛直自立、春溫遇人、丹山之頂、周海之濱、隨我如影、視我猶親、樓羅十百、一埤己身、參禪壁面、誦典糠錄吹、奔經論肆、豹斑屢窺、學我警欬、期我成禩、仲秋染疾、季秋勢危、圓枘方鑿、萬事垂違、官醫退謝、交友環洒、耳聾舌結、當訣搖頤、薪窮炊冷、骨植盈盜、過風容捕、笑電難追、病纏衰老、扶翊者誰、自性理會、約當來慈、欲了未了、再來何遲、享之。

これ字海藏主は師の弟子にして隨侍する事十有三年伽嚴之二楞圓覺梵網起信等の講席に連らざるなき勝縁を具し又曾て密に親友に語つて予れ尋常本師の床を拜せずんば未だ曾て食に就かずと云へる如き孝謹を天性とせしに拘らず元禍戊寅九月初七日俄に亡ぜしを以つて初七日忌に當つて此文を作る。師親の情溢れて涙なき能はざる文である。

賢巖禪師哀辭并序

無著禪師の思想

(四三)

世之論勝槩者、以名山秀水、比人之眉目、苟無眉目弗得爲人、佛祖之域、待高臘懿德、而興立、交過世之眉目論也、苟無其人、弗得爲佛祖之域、是之域之隱顯、實係乎人之存亡、故力士生地、有法殿崩、法幢倒之歎、不亦宜乎……中七行略……辭曰、

耆舊老木兮、緣飾境致、矧通宗說兮、戒德純粹、禪納湧隨兮、眷揭齊試、列國歸敬兮、疇知佞媚、呵罵法施兮、濟洩不二、侃然褻然兮、破昏解醉、信開金石兮、蓋誠之至、山菴岸嶸兮、躋攀多躓、天意難測兮、真人無位、搗謙騰輝兮、紫袍非譬、八旬閱世兮、緣盡脫屣、道俗槌胸兮、神鬼雨淚、主法良導兮、歲々就隴、塤篋不紹兮、衝軸誰寄、土曠岐分兮、盲進不易、法梁腐撓兮、魂褫心悸。

元祿丁丑孟春日 龍華晚學道忠九禮

その他論辯序說等數百を遺してゐるが何れも廣大雄渾にして大海の洋々たるものと共に縝密雋潔にして激湍幽咽學ぶべからざるものがある。江都己菴和尚は師の文を評して曰く、

原委當餐、輟然而起、洮頰拜受、掃一室而凡之、蕪香莊誦、則曩未得聞者、聞而未見者、大篇短章、諸體雜筆、瑣如寸錦、全如幅帛、徹々然、灑々然而一蒼於目前詳覽之、雅言奧辭、淵原於典誥也、玄旨逸論、凌跨於方等也、奇文譎字、之蒐羅禹汲、典辯旁說、之捭闔九流、胎々如日月、疊々如貫珠、其荒遠冥味如海納百川、而不知所底也、盛矣乎、予徒視其辭達而

理學字順、而守職、橐籥罔窮、毫芒無類、可謂文之至者矣。(葆雨堂虛癡集拜題)

當時は儒者佛者共に文壇隆盛の時なるに於いて此評言あるを以つてすれば師の文が如何に非凡倫絶なりしを見得ると同時に其思想の九流を吞吐し百群を超稜せられしかを知るに十分であらう。

六 禪師の經濟觀

倉粟實つれば禮節を知り衣食足れば榮辱を知るとは管子の言、蓋し人間生活の基底は云ふまでもなく財である。而して財は有形と無形とを論ぜず其用途如何は又以つて吾人の經濟生活を左右するものである。従つて財は生産消費何れに於いても意志作用の善惡が問題となり、引いてはそこに宗教の必要を見出さざるを得なくなるであらう。

今無著禪師の經濟思想を見るに財の用途如何を論じ約して度を越へず、簡にして禮を失はず、用ふべきにはよく之を用ひ、約すべきにはよく之を約す、所謂富んで奢らず貧にして食らざる不偏中正を以つて終始されたのである。今葆雨堂虛癡集に戴せたる江州犬上郡弘徳山龍潭禪寺法實輪藏記を見るに

物可必乎、作福作禍、願所用若何而已、冶鐵造劍、人視而動屠剔之機、鎔劍鑄佛、人視而生欽屬之想、至論財用、亦然、靡蕩之資挑達、則足釀獄黑之報、俵散之賑窮乏、則可結天白之因、同是財也、而利之與害、背馳匪啻、天淵之可比、張生是以捨市斤柯之錢、救逋負

欲自經者、苑文正、累給十千、起孫明復於泰山、如此類世稱其德行。(虛凝集卷十二)
と記してゐる。是れ正に財の効用は只其用途如何にして利害得失の分る、事天淵に至るも亦此の効用の正邪善惡に因ると論じ世の德行即道德的德行に就いて述べてゐる。更に論を進めて

若依吾教、審決之、則亦止漏道之客善耳、蓋託五家脆物、而成三德堅法、唯眞智者而能、江州彥根城、有士人能冬者、老而無後嗣、親族爲之請義子、冬嶽嶽不許、常屬左右曰、我謝世、則所有服玩器械、悉鬻之市、而所獲之緡纒、購大藏經壹副、而寄置之州之龍潭禪寺以充十方毳客看閱焉、我志願是已、孰知其他、冬亦無意於榆衣甘食之自奉、歲々割俸祿、期其成矣。(同上)

と張生、苑文等の善行を賞し、更に宗教的德行を説き、然して宗教的行爲の善なるものは不思議不思議如々の行動であり、自淨其意にあるを以つて三德の堅法を成する事は眞智のもの、能くならず所であると申されたのであらう。此に士人能冬の榆衣甘食に意を留めず、大法建立の爲に歲々の奉祿を割いて一大藏經を贖ひ經藏を造營するの淨信を賞讃され更に馮濟川の淨行を記して彼此好對財を用ふるに眞智を具せる者なりと述べてゐる。

昔者馮濟川參歷禪園、己眼稍正、亦積俸給、施大藏於諸寺、自作理曰、我賦耽痲癖、有財貯空虛、不作子孫計、不爲車馬通、不充玩好用、不買聲色娛、置錫無南畝、片瓦無屋廬、

所得月、俸給、唯將贖梵書、庶使披閱者、咸得入無餘、古佛爲半偈、尙乃捨全軀、是以不惜財、開示諸迷徒借問惜財人、終日較錙銖、無常忽到地、寧免生死無、馮公之意、見乎法偈、而卽能冬實錄也、數百歲之下、異域同調、亦可以爲奇矣、蓋二氏、用財之眞智者、而到論期、脉覽者、獲誓中摩尼、而放榜於選佛場、則與彼調世之一貧、成世之一名者、小大相絕焉。(同上)

と云へる如く世の德行は名聞を離れざるに反して濟川は財あれば空虚に貯へて子孫の爲にせず世樂の費に充てざるのみか梵書を贖ひ披閱する者をして菩提心を發せしめむと庶希するが故に其德行に於いては天淵の差を見るのである。而して此出世の善行は財を用ふるに當つて眞智あるが爲であると申されたのである。惟ふに君子は財を愛す之を取るに道ありと古人の云へる如く常に意を虛無恬淡なる正念に任せしめ法爾自然に行爲するならば正に之れ善行中の善にして財を得れば空虚に貯へ消費に臨んではよく佛作佛行となつて他をして涅槃に入るの善行方便たり得るであらう。吾人曾て濃州伊深の叢林にあつて霧隱軒嶽老師に侍す。師常に侍者に告げて曰く我れ百萬の富を有す。然も敢て貪り得たるに非ず他自ら持ち來つて我手裡に置くなり。又曰く人々財を愛せば貪心を離れて時節因縁を觀ずべし。他は惡心を有せざるが故に賣手來らば買ふべし。買手に會へば賣るべしと誠に濟川が虚空に貯へて子孫の爲にせず無著が財を用ふる眞智に據ると云へると同調にして禪的經濟觀の根幹であると共に名利を離れて名利を説き、名利を説きて道に入らしむる救世濟民の活手段と云

はねばならぬ。

禪師の此經濟觀は單に筆にせられしのみでなく生涯を通じて屢々現れてゐる。彼が七百餘卷の撰述に於いて其草稿に要する紙數の莫大なることは云ふまでもないが今これを見るに新紙を用ふるものは極めて稀にして十中八九は悉く接ぎ寄せである。甚しきは一紙に十餘ヶ所を接いでゐる。それに要する努力の容易ならぬ事は勿論一片紙の用途にまで如何に注意を拂はれしかを知る事が出来る。更に師の手記になる請藏掌簿を見るに元祿より元文に亘る五十一歳より八十九歳まで毎歲數回に及んで寺町妙傳寺前良實請藏所に於いて藏經を贖ふに際し其都度單價何処何分と記入し享保十六年辛亥十二月二十日には鐵眼和尚五十年忌に付き價減すと記してゐる事を以つてしても囊中豊ならず數十帙を一時に贖ひ得なかつた事を想像する事が出来る。而も此間に於いて『師以舊刊臨濟錄滅裂淨寫、改國點新雕云云(照冰堂紀年錄)』とある如く宗祖の語録を改刊して丹州龍潭寺、靜岡寶泰寺を始め奥山方廣寺等有縁の寺院へ寄贈してゐる。又龍潭寺の虛堂會に主たるや會中の費に充てよと金子十方を遣はしてゐる。其他竺印先師の爲に供養料銀五百匁を長善寺へ、母堂專貞尼菩提の爲めには寶仙寺へ銀百二十匁を納めてゐる。尙石窓首座萬休法兄追善の爲めには夫々金子を遣して石塔を建立してゐる。特に注意すべきは公益の爲めに財を惜しまれなかつた事である。即元文二年には鳥目九百紋を同四年には更に九百紋を院前道路の修繕費として寄贈してゐる。

是の如く財を用ふるの意、眞智に出でし衿衣甘食の爲にせず、用ふれば必ず他をして秣苦與樂入涅槃せしむるものであつた。従つて自らは枯淡の生活に甘んじてゐる。龍華禪院の條例を見るに

一、粒米寸薪無非_レ壇施、須_レ事々照顧、護惜常住、莫_レ損_レ自他之福、招_レ來世之禍殃。事係典座(條例七ヶ條ノ一)

と記されてある如く一粒米一片薪と雖も悉く擅信徒の膏血ならざるなく一衣一鉢と雖も如來慈悲の分身のあると云ふ菩薩思想に立脚されてゐる。従つてその用途如何は自他の福を損し來世の禍殃を招くと否とにあるのである。

これ古來禪門に於いて所謂隱德なる徳目にして道原杓底の水と云へる如く凡て事物を亂費せず、之を生かして用ひよと誠しむる所以である。

七 結 論

以上の論に於いて無著禪師の思想は徹頭徹尾宗門の興隆にあり、宗鑑の興隆は自家裡の恢復即ち見性成佛にあつた。然して天資聰明の性を稟けられし師は教界の時弊を看破し、外教家儒家の罵を斥し、内魔道禪徒の妄を開かんが爲に先づ以つて宗義の據つて來る所以を闡明して廣大の經論悉く指月の指入道の好縁ならざるなきを説き他面不文の文、不説の説ある事を明にされたのである。従つて師は學内外和漢に通じて博學廣識名を天下に馳せ、宗旨又濟洞二門の蘊奧を窮盡されしに拘ら

ず學徒を擁集して綺章繪句を弄し以つて人を驚かす事なく又衆を領して自立自執以つて自ら高しとせず畢世蔽廬を守つて孜孜兀々専ら意を著述に潛ましめ七百餘卷の書を遺して後世を益せんとされたのである。

惟ふに禪師の思想は令法久住の源泉なるが故に現代の如く宗教排撃の聲喧しき時に際しては特に採つて以つて龜鑑とすべきものなる事を信じて疑はぬ所である。

或人曰く無著は道眼を有せず只學を弄するの漢なりと、何ぞ己れの不知を蔽ふて古徳を責むるに嚴なると云はねばならぬ。宗學兼備の巨匠無著道忠禪師の論を結ぶに當つて道學妄昧の余に於いて如何でかその全豹を窺ふ事を得む。伏して希くは他日具眼の士出で來つて此冠絶せる所を紹述されむ事を。

論を草するに當つて貴重なる遺著信覽を快諾されし現龍華院主藤井宗龍師に多大の感謝を捧ぐると共に諸先生の御指導深謝の意を述ぶる次第である。尙此稿卒業論文中の一編を抽出せるを以つて解説不十分の點ある事をお詫して置く。